「～にかかわる」と「～とかかわる」の使い分け
―NINJAL-LWP for TWC に基づく考察から―

劉　悦

要　　旨

本研究は動詞「かかわる」に注目し、「名詞 + にかかわる / とかかわる」のコロケーションを NINJAL-LWP for TWC で抽出し、ニ格と ト格の使い分けを考察した。共起頻度上位 50 位の語において、ニ格の場合はモノ・コトを表す語（「命、問題、活動」）が 90.0％であるのに対し、ト格はヒトを表す語（「人、～たち」）が 82.0％となっており、LD 値からも同様の傾向が確認された。さらに、使用例を分析した結果、「～にかかわる」は、動作主体がモノ・コトであるか、ヒトであるかにかかわらず、動作対象がモノ・コトである場合に多用されており、「～とかかわる」は、動作主体も動作対象もヒトである場合に多用されるということが明らかになった。この使い分けの影響要素として、ト格の働きかけの相互性が考えられる。また、ニ格・ト格にかかわらず、動詞「かかわる」の動作主体は動作対象の意志性から一定の制約を受けるという結果も得られた。

【キーワード】格助詞　コロケーション　コーパス　ニ格　ト格

A Study on the Use of “Ni Kakawaru” and “To Kakawaru”: Analyses using NINJAL-LWP for TWC

LIU Yue

【Abstract】This research describes the differences of “Noun + Ni Kakawaru” and “Noun + To Kakawaru” using NINJAL-LWP for TWC. Among the top 50 nouns co-occurring most frequently with these expressions, 90.0% of the nouns co-occurring with “Ni Kakawaru” represent objects and events, while 82.0% of the nouns co-occurring with “To Kakawaru” represent people. Furthermore, it was found that “Ni Kakawaru” is often used when the object of the action is an object or event, and “To Kakawaru” is frequently used when both the subject of the action and the object of the action are humans. Besides, regardless of ni-kaku or to-kaku, the subject of “Kakawaru” is subject to certain restrictions due to the intentionality of the object.

【Keywords】Case particle, collocation, corpus, ni-kaku, to-kaku

1．はじめに

日本語の動詞には、動作対象を表すのに二格・ト格の両形式をとりうるものが存在している。例えば、動詞「かかわる」は、他者との関係を表すのに、二格をとる場合（例文①）とト格をとる場合（例文②）がある。

①しかしこれはゴムボールだ。どれだけ激しくぶつかろうと、命に関わるほどのものとは思えない。　（佐藤ケイ 2001『天国に涙はいらない』）
②その意味で精神医療界の人々は、マスコミ一般と関わることを恐れているように見える。　（月崎時央 2001「『少女監禁』と『バスジャック』」）

一方、「現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ」の「文字列検索」機能を使用して調べたところ、「命にかかわる」の用例は 105 件あるのに対し、「命とかかわる」の用例は 0 件である。これは、二格とト格は必ずしも置換可能なものではないということを示している。

しかし、「～にかかわる」と「～とかかわる」の相違点は辞書においても明確に記述されていない。そこで、本研究は動詞「かかわる」に注目し、NINJAL-LWP for TWC を用い、「～にかかわる」と「～とかかわる」の使い分けを解明する。

2．先行研究

2．1　動詞「かかわる」に関する先行研究

ここでは、各辞書における「かかわる」の記述を確認する。

『大辞林　第四版』（三省堂、2019 年）
⑴　関係をもつ。「人命に―・る問題だ」「沽券（コケン）に―・る」
⑵　こだわる。かかずらう。《拘》「小事に―・ってる時ではない」
『明鏡国語辞典（第三版）』（大修館、2020 年）
⑴　ある事柄や組織・人などと何らかの関係をもつ。関係する。「直接経営に―仕事がしたい」
⑵　＜「A が B に関わる」の形で＞ A が重大事として、さらなる重大事 B に深く関係する。連なり及ぶ。「旅先での発作は命に―」
⑶　かかずらう。かかずりあう。「小事に―っている暇はない」
『国語辞典（第三版）』（三省堂、1982 年）
⑴　影響を与える力をもつ。「命に―」
⑵　関係する。「経営に―」

『大辞泉　増補・新装版』（小学館、1998 年）

⑴　関係をもつ。関係する。「研究に―った人々」

⑵　重大なつながりをもつ。影響が及ぶ。「命に―る問題」

⑶　こだわる。「つまらぬことに―っている場合ではない」

各辞書において、「関係をもつ・関係する」という解釈が共通して見られる。また、全ての例文において、例外なくニ格が使用されている。これは、ニ格がト格より多用され、汎用性が高いという可能性を示唆している。よって、ト格の使用は一定の制限を受けると推測できるが、これには大量の実例に基づく考察が必要である。

２．２　ニ格とト格に関する先行研究

まず、『大辞林　第四版』におけるニ格とト格の用法を確認したいが、動詞「かかわる」の意味「関係をもつ・関係する」を踏まえ、２つの事柄の関係に言及する用法のみをここに記す。

ニ格

⑴　目標・対象などを指定する。「読書―熱中する」「魚釣り―行く」「君―見せてやろうか」

⑵　帰着点や動作の及ぶ方向を表す。「家―たどりつく」「車―乗る」「危篤（キトク）―おちいる」

ト格

動作・作用の相手・共同者を表す。「先生―話す」「友人―会社をつくる」

（松村編 2019『大辞林　第四版』）

以上の記述より、ニ格とト格との最も大きな相違点は、動作の方向性にあると考えられる。ニ格は目標・帰着点・動作の及ぶ方向を表すため、一方向的な動作が想定される。それに対し、ト格は「共同者を表す」ため、双方向の動作が想定される。ただし、ト格は「動作・作用の相手」を表すこともできるので、一方向的な働きかけを表すことも可能である。

次に、ニ格とト格の共通点と相違点を論じた先行研究を確認する。

仁田（1980）は、＜あい方＞格としてのニ格とト格を取り上げ、対称性の観点から相違点を分析した。対称性とは、二つの格を相互に交換しても、論理的意味が変化しないような現象である。以下の例文③④について、③は一方的な動作を表現しており、＜動作主＞格と＜あい方＞格が非対称性を有する。この場合、＜あい方＞格はニ格で表される。それに対し、④はお互いに話し合うことを意味しており、＜動作主＞格と＜あい方＞格

は対称性を有する。この場合、< あい方 > 格はト格で表現される。つまり、仁田は、ニ格とト格の使い分けを対称性のあるなしによるものとしているのである。

③太郎ハソノ事ヲ次郎ニ話シタ。
④太郎ハソノ事ニツイテ次郎ト話シタ。　　(仁田 1980 より引用、下線は原著者)

久野（1973）は、動作の方向性以外に、目的語の物理的・心理的な状態からの影響を指摘している。下記の例⑤が非文とされ、例⑥が一般的に使われないのは、目的語が物理的に・心理的に不動であれば、ト格をとらないからである。

⑤＊二郎ノ頭ガ壁トブツカッタ。
⑥私ハ先生ト会イニ、渋谷ニ行ッタ。　　(久野 1973 より引用、下線は原著者)

劉（1990）は、変化動詞「なる」と認識動詞に着目し、文学作品の用例を踏まえてニ格とト格の使い分けを考察した。ニ格は「自然に現れた心理状態・感覚状態」(例文⑦)、または事柄の自然変化を表現し、ト格は「推論した上での判断の結果」(例文⑧)、または「主観的意識・評価」の結果を表現するとしている（劉 1990：97-98)。そのうち、例文⑦は視覚を通して自然に得られた認識とされているが、「強い人・弱い人」の判断においては「主観的意識・評価」も働いていると考えられる。よって、ニ格を「自然に現れた心理状態・感覚状態」を表す表現とする結論については検討の余地が残っている。

⑦君、私は君の眼にどう映りますか、強い人に見えますか、弱い人に見えますか。
⑧甲種合格による徴兵とあるから、昭和十二年一月に海兵団へ入団したものと思われる。　　(劉 1990、下線は原著者)

鈴木（2001：51）は、動詞の性格によってニ格とト格の用法が異なると主張した。動作動詞と状態動詞の両方の性格を持つ動詞（「似る、なる」等）の場合は、「ニは二つの事柄の客観的な結び付きを表し、トは主観的な結び付きを表す」とし、それに対して、動作動詞（「会う」等）の場合は、「ニは一方的な、トは双方的な動作・作用を表す」と結論づけている。

また、大塚（2013：15）は、「～とする、～にする」を取り上げ、主語と変化前の想定の有無に着目し、「～とする」が「引用、仮定、将前、決定、同定」、「～にする」が「決定、変化、実現努力、仮想同定」の意味を表すと論じている。さらに、杉村（2022）は、「～と / にする、～と / になる」に焦点をあて、動作対象の語の性質に基づいてそれぞれの構

文がどんな変化を表しているかを分析している。しかし、いずれの研究も変化の性質の違いを論じているため、これらの結論を動詞「かかわる」に適用するのは難しい。

以上をまとめると、ニ格とト格の使い分けは先行研究で議論されているものの、これらの論文は特定の動詞を分析しているため、以上の結論がほかの動詞に適用できるかについては議論の余地がある。また、先行研究は主に動詞の対称性や方向性の観点から、動作対象と動作主体の性質を分析しているため、本研究も動作対象と動作主体を中心に分析を行う。

3．研究課題と研究方法

上述のように、「現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ」と辞書の例文において、「～にかかわる」は「～とかかわる」より多用され、後者の使用には一定の制約があると推測できるが、「～にかかわる」と「～とかかわる」の使い分けを論じた先行研究は見当たらない。本研究では動詞「かかわる」に焦点をあて、ニ格・ト格の使い分けの解明を研究の課題とする。

先行研究の見解を踏まえ、ニ格・ト格の使い分けは動詞の動作対象、および動作主体の性質に影響される可能性が大きいと考えられる。そのため、動詞の共起語の調査に適している NINJAL-LWP for TWC を使用し、「～にかかわる / ～とかかわる」の動作対象と動作主体の性質を考察する。NINJAL-LWP for TWC は「筑波ウェブコーパス」(Tsukuba Web Corpus）の検索ツールであり、「筑波ウェブコーパス」には、日本語のウェブサイトから収集された 11 億語の言語資料が格納されている。NINJAL-LWP for TWC の特徴として、動詞の共起語は出現頻度とともに表示されており、コロケーションの確認は簡単である。本研究では、コロケーションを糸口として、「～にかかわる」と「～とかかわる」の使い分けを探っていく。

分析の手順については以下とする。まず、「～にかかわる / ～とかかわる」との共起頻度が上位 50 位の名詞を確認し、そこから見られる傾向を LD 値の観点から検証する。頻度とは「筑波ウェブコーパス」における出現件数のことであり、当該コロケーションの使用実態を最も直接的に反映している。LD 値は両語の結び付きの強さを表し、「コロケーション統計では最もバランスのとれた指標の一つ」(赤瀬川ほか 2016:26）とされている。よって、この二つの指標を分析に取り入れる。

次に、共起しやすい名詞と「～にかかわる / ～とかかわる」の例文を目視にて確認し、動詞「かかわる」の動作主体の性質を把握する。最後に、動作主体と動作対象の性質を踏まえ、「～にかかわる」と「～とかかわる」の使い分けを考察する。

分析と考察で取り上げる例文は全て「筑波ウェブコーパス」より引用した実例であり、下線は全て筆者によるものであることを断っておく。

４. 分析

４．１　動詞「かかわる」の動作対象

４．１．１　共起頻度

まず、「～にかかわる」との共起頻度が上位 50 位の語を表 1 に示す。動作対象の性質を見るため、明確かつ具体的な意味を持つ名詞（「命、問題、運営」等）、または前接する語と結合して名詞になる接尾辞（「～等、～化、～づくり」等）を調査対象とする。同時に、名詞に属さないもの（「～的に、～密接に」等）、および「それ、こと、もの」など、指示対象の性質がはっきりしていないもの、「にかかわらず」と共起するもの（合計 12 個）は調査対象から除外し、表の備考欄に「×」をつける。よって、調査対象となる上位 50 位は、表における「×」がついていない項目となる。

表 1 からは、モノとコトを表す語が圧倒的に多く（45 個）、全体の 90.0％を占めていることがわかる。上位には、「命、問題、活動」などの名詞が見られ、以下のように使用されている（例文⑨⑩⑪）。例文⑨⑩には、重大な影響を与えるという意味合いが含まれている。例文⑪において、「関わる」はある事柄と関係を持つ（主語が人間である）ということを意味している。

⑨もしも食べて「じんましん」「喘息」「アトピー」の症状が現れたら、絶対食べてはいけません。生命に関わります。
⑩医師も、本人が「受診拒否」している場合、基本的に診察をしません。人権問題に関わるからです。
⑪（講師紹介）脱原発運動を出発点に、環境、経済、平和などの、さまざまな NGO 活動に関わる。

一方、表 1 の上位コロケーションにおいて、ヒトを表す語（一定数の人からなる団体を表す語を含む）は 5 個（10.0%）である。その 5 個が太字で表記している 29 位の「子供」、32 位の「【地域】」、35 位の「人」、37 位の「者」、54 位の「社会」であり、以下のような例文が見られる。例文⑫⑬の「関わる」はある人と関係を持つ、例文⑭は関係するという意味である。

⑫児童家庭課、児童相談所、法人が、園長に職員が提案した四項目の約束をさせる。「体罰をしない。子どもには関わらない。
⑬健康管理に気をつける。面倒な人には関わらない。
⑭障害者に関わる法律、制度。

表 1　「～にかかわる」の共起語（共起頻度の上位 50 位、頻度の高い順）

順位	コロケーション	頻度	備考	順位	コロケーション	頻度	備考
1	命に｛関わる｝	3791		32	**【地域】に｛関わる｝**	415	
2	的に｛関わる｝	3115	×	33	経営に｛関わる｝	395	
3	それに｛関わる｝	1836	×	34	安全に｛関わる｝	390	
4	ように｛関わる｝	1399	×	35	**人に｛関わる｝**	388	
5	のに｛関わる｝	1270	×	36	そこに｛関わる｝	387	×
6	問題に｛関わる｝	1131		37	**者に｛関わる｝**	359	
7	密接に｛関わる｝	1122	×	38	健康に｛関わる｝	352	
8	活動に｛関わる｝	1053		39	全般に｛関わる｝	336	
9	有無に｛関わる｝	1051	×	40	支援に｛関わる｝	333	
10	生活に｛関わる｝	895		41	制作に｛関わる｝	327	
11	ことに｛関わる｝	856	×	42	プライバシーに｛関わる｝	311	
12	等に｛関わる｝	764		43	分野に｛関わる｝	310	
13	運営に｛関わる｝	666		44	管理に｛関わる｝	301	
14	教育に｛関わる｝	663		45	利用に｛関わる｝	298	
15	開発に｛関わる｝	659		46	これに｛関わる｝	292	×
16	【一般】に｛関わる｝	645	×	47	化に｛関わる｝	290	
17	根幹に｛関わる｝	618		48	内容に｛関わる｝	287	
18	事業に｛関わる｝	591		49	サービスに｛関わる｝	283	
19	性に｛関わる｝	556		50	研究に｛関わる｝	277	
20	仕事に｛関わる｝	551		51	全てに｛関わる｝	276	
21	環境に｛関わる｝	513		52	情報に｛関わる｝	274	
22	づくりに｛関わる｝	506		53	政治に｛関わる｝	263	
23	プロジェクトに｛関わる｝	505		54	**社会に｛関わる｝**	260	
24	体に｛関わる｝	502		55	形成に｛関わる｝	252	
25	如何に｛関わる｝	477	×	56	人命に｛関わる｝	250	
26	事件に｛関わる｝	462		57	取り引きに｛関わる｝	247	
27	医療に｛関わる｝	457		58	人生に｛関わる｝	236	
28	業務に｛関わる｝	449		59	福祉に｛関わる｝	231	
29	**子供に｛関わる｝**	432		60	ものに｛関わる｝	229	×
30	生死に｛関わる｝	426		61	政策に｛関わる｝	228	
31	運動に｛関わる｝	424		62	治療に｛関わる｝	228	

次に、「～とかかわる」と共起する頻度が上位 50 位の語を見ていく（表２）。こちらも同様に、明確かつ具体的な意味を持つ名詞、または前接する語と結合して名詞になる接尾辞を調査対象とする。また、指示対象の性質がはっきりしていないもの（「こと、だれ」等）、実際ト格をとっていないもの（例えば、「否と｛関わる｝」の用例は全て「～と否とにかかわらず」の形をとっている）は調査対象から除外し、表の備考欄に「×」をつける（合計６個）。12 位の「ほうと｛関わる｝」については、実際の用例は全て「～方（かた）とかかわる」が使われた例文であるため、調査対象に含める。

表２から、「～とかかわる」と共起頻度の高い語に、ヒトを表す語（「人、子供、たち」等）が 41 個あり（一定数の人からなる団体を表す語を含む）、全体の 82.0％を占めていることがわかる。その他、モノとコトを表す名詞（「社会、問題」など）が９個（18.0%）見られる。

両者の比較を通し、ニ格・ト格の使用傾向の違いが明らかに現れた。「～にかかわる」は高確率でモノとコトを表す名詞と共起しているのに対し、「～とかかわる」はヒトを表す名詞と共起しやすいのである。

４．１．２　LD 値

上述したように、LD 値は「コロケーション統計では最もバランスのとれた指標の一つ」（赤瀬川ほか 2016：26）とされているため、ここでは LD 値を用いて「～にかかわる / ～とかかわる」に見られた使用傾向の違いを検証する。

まず、「～にかかわる」の共起語を LD 値の高い順で並べ替え、上位 50 位を表３に示す。4.1.1 節の基準を踏まえ、「密接に｛関わる｝、如何に｛関わる｝、それに｛関わる｝」を調査対象から除外し、表の備考欄に「×」をつける。LD 値の上位 50 位において、全ての語はモノとコトを表す語であり、ヒトを表す語は存在していない。

次に、「～とかかわる」の共起語（LD 値の上位 50 位）を表４に示す。4.1.1 節の基準を踏まえ、「否と｛関わる｝、誰かと｛関わる｝」を調査対象から除外し、備考欄に「×」をつける。表４において、ヒトを表す語（太字にした項目）は 37 個あり、全体の 74.0％を占めている。モノとコトを表す名詞は 13 個（26.0％）ある。その他、人間以外の生物を表す名詞（「生き物、動物」）が２個現れている。

以上の LD 値のデータは、4.1.1 節で観察された傾向を支持している。つまり、「～にかかわる」はほとんどの場合、モノとコトを表す名詞と共起するのに対し、「～とかかわる」はヒトを表す名詞と共起しやすいということである。

表２　「～とかかわる」の共起語（共起頻度の上位 50 位、頻度の高い順）

順位	コロケーション	頻度	備考	順位	コロケーション	頻度	備考
1	人と｛関わる｝	1956		29	ものと｛関わる｝	52	×
2	子供と｛関わる｝	452		30	らと｛関わる｝	49	
3	たちと｛関わる｝	412		31	生徒と｛関わる｝	47	
4	社会と｛関わる｝	333		32	様と｛関わる｝	43	
5	さんと｛関わる｝	219		33	女性と｛関わる｝	40	
6	者と｛関わる｝	161		34	さまと｛関わる｝	39	
7	他人と｛関わる｝	157		35	先生と｛関わる｝	36	
8	他者と｛関わる｝	155		36	企業と｛関わる｝	35	
9	友達と｛関わる｝	145		37	子と｛関わる｝	35	
10	問題と｛関わる｝	142		38	相手と｛関わる｝	35	
11	自然と｛関わる｝	137		39	だれと｛関わる｝	33	×
12	ほうと｛関わる｝	132		40	組織と｛関わる｝	33	
13	人々と｛関わる｝	125		41	人達と｛関わる｝	32	
14	ことと｛関わる｝	113	×	42	仕事と｛関わる｝	32	
15	達と｛関わる｝	110		43	患者と｛関わる｝	31	
16	【地域】と｛関わる｝	107		44	それと｛関わる｝	30	×
17	世界と｛関わる｝	89		45	彼と｛関わる｝	30	
18	環境と｛関わる｝	86		46	海外と｛関わる｝	29	
19	人間と｛関わる｝	85		47	物と｛関わる｝	29	
20	地域と｛関わる｝	84		48	生活と｛関わる｝	29	
21	【組織】と｛関わる｝	82		49	仲間と｛関わる｝	28	
22	自分と｛関わる｝	80		50	否と｛関わる｝	28	×
23	家族と｛関わる｝	72		51	大人と｛関わる｝	27	
24	お客様と｛関わる｝	70		52	教育と｛関わる｝	27	
25	方々と｛関わる｝	66		53	性と｛関わる｝	26	
26	【一般】と｛関わる｝	65	×	54	健康と｛関わる｝	25	
27	私と｛関わる｝	62		55	方と｛関わる｝	25	
28	【人名】と｛関わる｝	60		56	行政と｛関わる｝	25	

表 3　「～にかかわる」の共起語（LD 値の上位 50 位、LD 値の高い順）

順位	コロケーション	LD 値	備考	順位	コロケーション	LD 値	備考
1	命に｛関わる｝	8.73		28	経営に｛関わる｝	5.38	
2	密接に｛関わる｝	8.32	×	29	製作に｛関わる｝	5.35	
3	有無に｛関わる｝	8.05		30	分野に｛関わる｝	5.34	
4	根幹に｛関わる｝	7.56		31	問題に｛関わる｝	5.33	
5	生死に｛関わる｝	7.06		32	健康に｛関わる｝	5.32	
6	運営に｛関わる｝	6.83		33	医療に｛関わる｝	5.28	
7	如何に｛関わる｝	6.74	×	34	安全に｛関わる｝	5.28	
8	プロジェクトに｛関わる｝	6.54		35	育成に｛関わる｝	5.25	
9	全般に｛関わる｝	6.45		36	代謝に｛関わる｝	5.24	
10	プライバシーに｛関わる｝	6.43		37	福祉に｛関わる｝	5.22	
11	人命に｛関わる｝	6.3		38	決定に｛関わる｝	5.22	
12	づくりに｛関わる｝	6.28		39	ビジネスに｛関わる｝	5.19	
13	制作に｛関わる｝	6.2		40	育児に｛関わる｝	5.15	
14	開発に｛関わる｝	6.02		41	それに｛関わる｝	5.12	×
15	活動に｛関わる｝	6		42	制御に｛関わる｝	5.1	
16	存亡に｛関わる｝	5.96		43	設立に｛関わる｝	5.08	
17	事件に｛関わる｝	5.95		44	事業に｛関わる｝	5.07	
18	存続に｛関わる｝	5.85		45	作成に｛関わる｝	5.06	
19	形成に｛関わる｝	5.84		46	支援に｛関わる｝	5.05	
20	大小に｛関わる｝	5.68		47	政治に｛関わる｝	5.03	
21	生活に｛関わる｝	5.64		48	食に｛関わる｝	4.98	
22	業務に｛関わる｝	5.63		49	仕事に｛関わる｝	4.97	
23	子育てに｛関わる｝	5.58		50	設計に｛関わる｝	4.96	
24	運動に｛関わる｝	5.54		51	年齢に｛関わる｝	4.94	
25	教育に｛関わる｝	5.49		52	政策に｛関わる｝	4.93	
26	本質に｛関わる｝	5.45		53	暮らしに｛関わる｝	4.93	
27	人権に｛関わる｝	5.45					

表４　「～とかかわる」の共起語（LD 値の上位 50 位、LD 値の高い順）

順位	コロケーション	LD 値	備考	順位	コロケーション	LD 値	備考
1	他者と｛関わる｝	7.15		27	事物と｛関わる｝	3.42	
2	他人と｛関わる｝	5.92		28	誰かと｛関わる｝	3.33	×
3	友達と｛関わる｝	5.45		29	仲間と｛関わる｝	3.32	
4	外界と｛関わる｝	4.97		30	大人と｛関わる｝	3.21	
5	否と｛関わる｝	4.81	×	31	園児と｛関わる｝	3.17	
6	グスクと｛関わる｝	4.55		32	お客様と｛関わる｝	3.15	
7	祭祀と｛関わる｝	4.5		33	家族と｛関わる｝	3.07	
8	人達と｛関わる｝	4.47		34	生き物と｛関わる｝	3.06	
9	子供と｛関わる｝	4.43		35	暮らしと｛関わる｝	3.03	
10	人と｛関わる｝	4.33		36	アーティストと｛関わる｝	3.03	
11	人々と｛関わる｝	4.27		37	特色と｛関わる｝	3.03	
12	社会と｛関わる｝	4.17		38	周囲と｛関わる｝	3.01	
13	方々と｛関わる｝	4.04		39	死者と｛関わる｝	3.01	
14	達と｛関わる｝	3.99		40	コミュニティーと｛関わる｝	2.93	
15	暴力団と｛関わる｝	3.88		41	世俗と｛関わる｝	2.88	
16	たちと｛関わる｝	3.86		42	一人一人と｛関わる｝	2.85	
17	お子さんと｛関わる｝	3.86		43	留学生と｛関わる｝	2.81	
18	自然と｛関わる｝	3.85		44	動物と｛関わる｝	2.8	
19	児と｛関わる｝	3.81		45	国々と｛関わる｝	2.79	
20	部署と｛関わる｝	3.79		46	論点と｛関わる｝	2.77	
21	天命と｛関わる｝	3.74		47	皇室と｛関わる｝	2.77	
22	生徒と｛関わる｝	3.66		48	様と｛関わる｝	2.71	
23	異性と｛関わる｝	3.6		49	わが子と｛関わる｝	2.68	
24	さまと｛関わる｝	3.54		50	海外と｛関わる｝	2.67	
25	年寄りと｛関わる｝	3.49		51	俳句と｛関わる｝	2.65	
26	クラスメートと｛関わる｝	3.49		52	人間と｛関わる｝	2.64	

４．２　「かかわる」の動作主体

この節では、NINJAL-LWP for TWC を用いて動詞「かかわる」の動作主体を調査する。「～にかかわる / ～とかかわる」の例文が 11 万件以上あるため、「～にかかわる」と共起しやすい語 50 個（表１）、「～とかかわる」と共起しやすい語 50 個（表２）それぞれの例文 20 件を分析のサンプルとする。20 件の例文は原則、NINJAL-LWP for TWC の例

文表示欄における 1 番目から 20 番目の例文とする。次に、サンプルの例文を目視にて確認し、動作主体がヒト（一定数の人からなる団体を含む）であるか、モノ・コトであるかを判断する。例えば、下記の例文⑮において、動詞「関わる」の動作対象は「問題」（モノ・コト）、主体は「男性」（ヒト）である。

⑮男性は内助の功を受けたがらない。衣食住の問題に関わらない。子供の為に母親が苦労する。

また、動詞「かかわる」が「～にもかかわらず」の形式で使用された例文がある場合、格助詞の選択には制限があるため、例文を分析対象外とする。さらに、「かかわる」の代わりに、「～とのかかわり」の形が使用される例文も対象外とする。その結果、「～とかかわる」と共起する 6 個の語の例文数が 20 件未満になったため、実際に分析に取り入れた例文は 1969 件となった。

例文の分析結果を表 5 に示す。動作対象と動詞主体の性質によって、全ての例文を 8 つのパターン (A ～ H) に分ける。まず、「～にかかわる」の 4 つのパターンの中で、(A) (B) の割合の合計値（90.0％）が（C）（D）の合計値（10.0％）より高いことから、「～にかかわる」は動作対象がモノ・コトである場合に多用されるとわかる。同時に、(A) と (B) の割合には顕著な差が見られなかった。また、「～とかかわる」の 4 つのパターンにおいて、(H) の割合は 79.7％で最も高く、(G) の割合は 3.7% で最も低い。

5．考察

以上を踏まえ、まず「～にかかわる」と「～とかかわる」の使用傾向をまとめる。「～

表 5　「～にかかわる / とかかわる」の動作主体と動作対象

	動作主体	動作対象	例文件数	合計	
～に かかわる	(A) モノ・コト	モノ・コト	548(54.8%)	900(90.0%)	1000 (100%)
	(B) ヒト		352(35.2%)		
	(C) モノ・コト	ヒト	41(4.1%)	100(10.0%)	
	(D) ヒト		59(5.9%)		
～と かかわる	(E) モノ・コト	モノ・コト	97(10.0%)	161(16.6%)	969 (100%)
	(F) ヒト		64(6.6%)		
	(G) モノ・コト	ヒト	36(3.7%)	808(83.4%)	
	(H) ヒト		772(79.7%)		

にかかわる」は、動作対象がモノ・コトである場合に多用されるが、パターン（A）と（B）の割合に顕著な差がないため、動作主体に関しては顕著な傾向が見られなかった。また、「～とかかわる」について、パターン（H）の割合の高さから、動作対象も動作主体もヒトであるパターンは、「～とかかわる」の最も典型的な使い方だと言える。一方、それ以外の場合、「～とかかわる」はあまり使用されていない。

次に、「～にかかわる」と「～とかかわる」の使い分けに影響を与える要素を考察する。「～とかかわる」は主にヒトとヒトとの関係を表しているが、その理由について、仁田（1980）と久野（1973）で言及されたト格の働きかけの相互性が考えられる。つまり、ト格にはお互いに何らかの作用を与える性質があるため、自ら行動できるヒトとヒトとの相互関係の特徴が反映されやすいのである。下記の例文⑯を参照されたい。「人と関わる癒し」の説明において、人との「コミュニケーション」が言及され、双方的な動作が明確に示されている。このように、働きかけの方向性は、「～にかかわる」と「～とかかわる」の使い分けに影響を与える一要素であると考えられる。

⑯４. 人と関わる癒し。
恋人、友人知人、家族との会話・メール、電話、手紙でのコミュニケーションなど人との関わりを通して。

さらに、表５のパターン（C）と（G）に注目したい。働きかけの相互性の観点から、相互性のない関係であればニ格が用いやすく、パターン（A）～（C）の割合はいずれも高いはずであるが、（C）の割合は 4.1％で比較的に低い。また、「～とかかわる」の例文において、（C）と同じ動作主体・動作対象の（G）も割合が 3.7％と、８つのパターンの中で最も低い値を示した。そのため、ニ格・ト格にかかわらず、「モノ・コトがヒトに/とかかわる」という構文はあまり用いられないと考えられる。

モノ・コトとヒトの大きな違いとして、意志性の有無が挙げられる。意志性の定義については、仁田（1991：243）の自己制御性の定義を援用し、「動きの主体が、動きの発生・遂行・達成を自分の意志でもって制御することができる、といった性質である」とする。つまり、モノ・コトは意志性を持たないが、ヒトは意志性を持っている。パターン（C）（G）があまり使われていないことは、意志性のない動作主体と意志性のある動作対象とのセットでは、「かかわる」は用いられにくいという可能性を示唆している。

久野（1973）は似たような観点（動的であるかどうか）からト格の使用制限を指摘したが、その考察対象は動作動詞に限られており、焦点も目的語に当てられている。久野（1973）によると、下記の例文⑤（再掲）において、目的語の「壁」は不動であるため、ト格を使用すると非文になる。NINJAL-LWP for TWC で調べた結果、「壁にぶつかる」

の用例は 1530 件あるのに対し、「壁とぶつかる」の用例は 5 件あるため、「壁とぶつかる」の使用は許容度が低いといえる。

⑤＊二郎ノ頭ガ壁トブツカッタ。　(久野 1973)

一方、本研究で観察されたのは、意志性のない動作主体（不動）と意志性のある動作対象（動）とのセットは、動詞「かかわる」と共起しにくいという傾向である。無生物主語他動詞文における制約は多くの先行研究で指摘されている（角田 1991、熊 2009 等）が、自動詞「かかわる」の使用における制約は本研究で観察された。他動詞文において、動作主体の意志性が動作対象より低い場合、動作の働きかけがしにくくなる。「かかわる」の文にも動作主体と動作対象の存在があるため、この制約が生じていると考えられる。

6．結論

本研究では、NINJAL-LWP for TWC を使用し、コロケーションの統計データと例文を踏まえ、「～にかかわる」と「～とかかわる」の使い分けを考察した。その結果、「～にかかわる」は、動作主体がモノ・コトであるか、ヒトであるかにかかわらず、動作対象がモノ・コトである場合に多用されており、「～とかかわる」は、動作主体も動作対象もヒトである場合に多用されるということが明らかになった。この使い分けの影響要素として、ト格の働きかけの相互性が考えられる。つまり、双方向的な働きかけを内包しているヒトとヒトとの関係を表現する際に、ト格はニ格より使われやすいのである。さらに、動作主体がモノ・コト、動作対象がヒトである例文の割合の低さから、ニ格・ト格にかかわらず、動詞「かかわる」の動作主体は動作対象の意志性から一定の制約を受けるという結果も見られた。

参考文献

赤瀬川史朗・プラシャント　パルデシ・今井新悟（2016）『日本語コーパス活用入門：NINJAL-LWP 実践ガイド』大修館書店

熊鶯（2009）『鍵がドアをあけた：日本語の無生物主語他動詞文へのアプローチ』笠間書院

大塚望（2013）「「とする」と「にする」の違い：意味･用法を中心にして」『日本語日本文学』23 号：15-33

北原保雄（編）（2020）『明鏡国語辞典（第三版）』大修館

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武（編）（1982）『国語辞典（第三版）』三省堂

杉村泰（2022）「日本語の「N1 を N2 と / にする」構文と「N1 が N2 と / になる」構文の N2 の特徴について」『名古屋大学人文学研究論集』5 号：107-125
鈴木英夫 (2001)「格助詞と動詞 --「～に似る」と「～と似る」を中心に」『日本語学』20 (3) 号：44-52
角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書店
松村明（監修）（1998）『大辞泉　増補・新装版』小学館
松村明（編）（2019）『大辞林　第四版』三省堂
劉素英（1990）「『直接格』の『に』と『間接格』の『と』について」『ことば』11 号：89-99

調査資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search
筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所『NINJAL-LWP for TWC』https://tsukubawebcorpus.jp

用例出典

佐藤ケイ（2001）『天国に涙はいらない』メディアワークス
月崎時央（2001）「『少女監禁』と『バスジャック』」宝島社